

# 演習場に残ったキマダラモドキ 諏訪 哲夫



キマダラモドキ(♀)

キマダラモドキの生息地(演習場内の明るいクヌギ林)

キマダラモドキはタテハチョウ科(ジャノメチョウ亜科)の翅を広げると6cmくらいの、蛇の目紋(眼状紋)が美しく際立ったチョウで、7~8月に年1回発生し、幼虫はカヤツリグサ科、イネ科を食べ、1齢幼虫で冬を越します。北海道から本州、四国、九州に分布していますが、いずれの地域でも生息地は限られています。静岡県における初めての記録は1953年7月28日、富士宮市麓で高橋真弓さんの弟の勝夫さんによって採集され、その後、朝霧高原、裾野市十里木周辺、御殿場市東富士演習場、富士市越前岳などから記録されています。いずれも富士山の周辺に限られ、県の中部、西部地域からは全く知られていません。1980年代まではこれらの地域では比較的安定して生息していましたが、1990年代になって、富士山西麓の朝霧高原からの記録が途絶えてしまいました。このころ、東富士演習場内は、不発弾による事故などがあって演習場内への立ち入りが厳しく制限されることとなって調査ができなくなってしまいました。演習場の周辺の御殿場市太郎坊や裾野市須山あるいは越前岳などからも生息に関する情報がなくなって、演習場内の状況は明らかではないまま、その他の地域はかなり厳しい生息状況と見られたことから絶滅危惧Ⅱ類にランクされました。

2010年ごろ、十里木の別荘地内で本種が撮影されたとの情報はいりましたが、別荘地内の調査は立入制限や、生息適地を見つけることが困難なことから調査を十分行えず、確認には至りませんでした。最近、レッド調査のための演習場内への立ち入りが許可されたことから調査が急速に進み、2011年8月、16年ぶりに再確認することができ、個体数も安定していることが分かりました。

主な生息場所は演習場内のクヌギ、コナラあるいはウラジロモミなどの明るい林とその林縁です。成虫はカブトムシなどと一緒に樹液を吸っていることが多いですが、他に止まる時は灌木や草本が茂っている樹木の根際や、小枝が密集した樹幹の高いところなどで採集は大変困難です。

富士山西麓の朝霧高原は各種の開発や、植生の遷移などの影響で生息は極めて厳しい状況ですが、まだどこかに生息しているという期待を捨て切れません。一方東麓の演習場はおそらくこの先かなりの年月安泰でしょう。